

音楽があったから — 逆境を乗り越えていく力 —

梅本 実 先生

東京藝術大学附属音楽高等学校、東京藝術大学を経て、同大学院修士課程器楽科ピアノ専攻修了。末永博子、勝谷壽子、伊達純各氏に師事。ドイツ・デットモルト北西音楽大学卒業。さらに引き続きハンブルクにて研鑽を積む。R.F. クレッチマー、C.ハンゼンの各氏に師事。帰国後東京、札幌、福岡各地でリサイタル開催。札幌交響楽団、九州交響楽団と共演。またドイツ歌曲の共演ピアニストとしても各地で幅広い活動を続けている。文部省在外研修員としてドイツ・カールスルーエ音楽大学において白井光子・H.ヘルのドイツリート解釈法クラスで学ぶ。2001年からシリーズで続けているリサイタル「長島剛子・梅本実リートデュオ・リサイタル—世紀末から20世紀へ」は昨年（2013年）で12回を数え、その斬新な企画性と緊密なアンサンブルは毎回大変高い評価を受けている。「札幌市民芸術祭大賞」（1999年、2002年）、「第9回道銀芸術文化奨励賞」（2000年）、「第29回札幌文化奨励賞」（2001年）、「平成14年度文化庁芸術祭優秀賞」（2003年）受賞。北海道教育大学助教等を経て現職。



常に穏やかな先生とお見かけしていたのですが、インタビュアーではあふれるように音楽や仲間への想いをお話しいただきました。小学校時代から週一回、片道5時間かけてのレッスンを続け、高校受験のために一人住まいもなさっていたとお聞きし、ジーンとくるものがありました。

ウクレレ漫談デビュアー?

—音楽との出会いは?

梅本 生まれは長崎です。小さい頃は人見知りするおとなしい性格で、親は少し心配していました。ある時、駄菓子を手を抱えて帰って来たので、不審に思った親が問い質すと、近所の料亭の仲居さんたちから貰ったとのこと。その頃テレビで流行っていた牧伸二のウクレレ漫談、「あー、やんなっちゃった」というのを、父が夜店で買ってきたウクレレを片手に真似をしたらバカ受けして、「また、やって」と色々なところで呼ばれ、その度にお菓子をもたらって帰ってきたらしいのです。

—じゃ、ピアノデビュアーの前にウクレレ漫談デビュアーですね。

梅本 そう。(笑) この子は人前に出ると全然ダメなのに、意外とそういう芸をやらせるといいんじゃないかと。その後幼稚園のヤマハ音楽教室に通うようになりました。

—ピアノですか?

梅本 最初はオルガンで、小学校に入ってもまだピアノとエレクトーンと両方。三年生の時ピアノ一本になって、長崎では知られたピアノの先生に習うようになりました。五年生になって、毎日新聞社主催の学生音楽コンクールが福岡であり受けたのですが、見事予選で落とされて。うちの親が熱心というか、審査員の自宅の電話番号を調べて、片っ端から電話を掛けていったのです。

—なぜ落したかと?

梅本 ええ。「専門的に続けたいのであれば、基礎からやり直さないといけないのでは」と審査員の何人かに言われたそうです。その中の一人が、「うちに来てみない?」とおっしゃってください。それを長崎の先生にお話ししたら、その先生は立派というか、「そう言うってくださいるのなら、その先生のとこで勉強してみたら」と。で、後ろ髪を引かれたのですが、汽車で五時間かけて福岡に通うことになりました。中学二年の時に同じコンクールを受け、予選・本選と通過して全国大会に。その時初めて東京に行きました。結果はダメだったのですが、今度は「高校から東京を目指さない」ということになり、「長崎から週一

回通っているようでは無理だから、福岡に住みなさい」と、中学生にして一人でアパート暮らしになりました。

素晴らしき仲間と悩み多き大学時代

―芸高(東京藝大附属高校)での出会いはい?

梅本 そこで初めて同じ目標を持った仲間たちと出会ったわけです。弦や管の友達が出来、一緒に遊んだり、伴奏したりしました。

でも、彼らは親が交響楽団の首席奏者とか、音大の先生とか、小さい時からの環境が全く違う。それまでピアノ以外のオーケストラの曲はほとんど知らなかったわけで、話についていくために、未知のジャンルの音楽を秘かにたくさん聴き勉強しました。

―そういう切磋琢磨があつて、無事に大学に行かれた?

梅本 入学したのですが、それまでのすごく頑張ったので、反動があつたようです。大学になって初めて、ピアノをやっていることとつてどういう意味があるのかとか、このままピアノをやっているのか、このだろうかとか。今まで考えたこともないような不安や迷いが出てきました。学内には、プロになる人は価値があり、そうじゃない人は十把一からげというような空気があつて、音楽が純粹に好き

でそれを追求しようということではなく、世に出ることのほうが大事だというような雰囲気がありました。それでピアノのレッスンは熱心に受けていたのですが、それ以外の勉強はおざなりになつてしまいました。大学の地下にロッカールームがあつて、(伝説の)古い卓球台があつて、そこに行けば必ず誰かに会えるので、入り浸つていました(笑)。

自分の演奏に納得がいかな

―それで、大学院に行かれ、そして留学?

梅本 その頃同級生は次々にヨーロッパに留学し、自分一人取り残されて寂しい思いをしていました。でも留学までは踏み切れず、小さなコンクールを受けたり、リサイタルを開いたりしていたのですが、自分の演奏に納得がいかない。

―どんな点でしょうか?

梅本 ものすごく難曲、ヴェルトゥオーゾの超絶技巧の曲ばかり、猛練習して、そういうものを弾いて自己満足しているといううな。

―でも、難曲探検しなきゃいけない時期ってありますよね。

梅本 まあ、ある時期、そういうことも必要かもしれないでしょうけれども。ただ、難しい曲を並べ

て弾くだけで、何か自分の演奏が内容に乏しいというか…。

ハンゼン先生との出会い

―どのような作品でした?

梅本 ブラームスのバガニーニヴァリエーションとか、リストのソナタとか、内容も深い曲ですけど、技術が前面に出てくる曲、リサイタルでもそういうのばかり並べて弾いていました。その後ロータリーの留学奨学金の試験に運良く受かったのですが、行き先がまだ決まっていなくて、たまたま来日されていたドイツのコンサート・ハンゼン先生のレッスンを受けた時、二、三、自分が本当に悩んでいた技術的なことを的確におっしゃっていたので、それで、この先生に習えば、モヤモヤも晴れていく可能性があるのではないかと。

―留学先はハンゼン先生のところでしょか?

梅本 ハンゼン先生はご高齢なので、もう大学では教えられないということでした。しかし、奨学金のためにどこかの大学に所属しなきゃいけないので、デットモルトにいらしたお弟子さんのレナート・フィッシュャー・クレッチマー先生を紹介していただいて、そこで勉強しながら、ハンゼン先生

のレッスンにも通うということになつたのです。

混乱!

―どのようなレッスンを

梅本 モーツァルトのK330のソナタを持つていったことがありました。左手が「ミドミド……」と繰り返す。結局レッスンは「ミドミド……」で一時間終わってしまった。自分は今まで難曲でリサイタル開いていたのに「ミドミド……」だけで終わってしまうノしかも、最初は何が悪くて先に進まないのか、分からないのです。先生は、身体の繋がりが悪いのだ、指がフニャフニャだの、色々なことをおっしゃるけれども、ほんとの原因はどこにあるのか、分からない。それで、本当に混乱ノコンサートじゃなくで混乱ノ(大笑)

―ずっと「ミドミド……」ですか。

梅本 卒業試験を受けなければいけない時期になり、ものすごく量の曲を仕上げなきゃいけないのに、一音一音に拘つていたらとても仕上がらない。ハンゼン先生は分かってくださっていたので、半年ぐらいはクレッチマー先生とここでレパートリーを仕上げ、卒業試験を受け、卒業してから改めて勉強の続きをしました。

耳自体がダメ？

―仲間内で聴き合っていて、助言を得たりとかいいことば？

梅本 ありました、しょっちゅう。それをきっかけにしてレッスンに行っても、また違うと言われて：毎回毎回その連続でした。とにかくドイツの伝統はこうだ、ということをや妥協せずに指摘される。先生のおっしゃる何が良く何が悪いのか、その違いが中々分からない。だから、これは耳自体がダメなのだと思います、本場の音というのを、もつとピアノの音を聴かなきゃいけないと思って演奏会に：。ハンブルクのムジークハレに通って、三時間、四時間立ちっぱなしで、色々なピアノニストのリサイタルを聴きました。生演奏を改めて聴いてみると、意外に「ふーん、そうなのか」というピアノニストもいたり、逆に、巨匠と言われるトルドルフ・ゼルキンや、ホルヴィッツ等古い世代のピアノニストも聴き、全然違うなと思ったりしました。ミケランジェリとか、音そのものが全然、音の豊富さも違うのです。

グルペローヴァはすごいかった！

―図書館としては本物に出会うために資料を利用していたらとお勧めしているのですが。

梅本 そう、きっかけになりますよね、聴くことが。

―憧れないと、本物に出会っても分らない？

梅本 分からないと思いますね、そういうステップがないと。それと、更に本物を聴いた後で、ますますその演奏家が聴きたくなつて、その頃、レコードが安く買った時代だったので、それらを買ってきでどんどん聴いていました。

梅本 あと、とにかく歌ですね。ハンブルクのオペラハウスに良く通いました。時にはドミンゴとか、パヴァロッティとか有名な歌い手も来て徹夜でチケットを買って観に行きました。グルペローヴァは鳥肌が立つくらいすごかった。声でこんなことが出来るのかと。そういう声の表情の多彩な変化をピアノという楽器で少しでも出せたら、その時本当に思いました。

弾き終わった後、ドイツ語で説明

―歌曲との出会いは？

梅本 声楽の長島剛子先生が、ケルンのハルトムート・ヘル先生のクラスでドイツ歌曲を学んでいて、そのレッスンをとても面白く、いつも聴講生で一杯だという話を聞き、アウトバロンを車で飛ばして聴きに行きました。そうしたら「聴くだけじゃなくて、弾いてみたら」と言われ、シューマンの歌曲

を演奏したのです。が、カチカチで、もう最初の音が全然始められないような状態。ヘル先生から「何を考えてるんだ」と言われ……。多分、先生は、詩の内容がこうだから、こう弾きたい：という答えを期待していたのでしょうか。しかし

そうではなくて、「こういう音で始めたいので、ピアノのタッチをどうしようかとかいうことを考えていた」と答えたので、先生もびつくりして、「何言ってるんだ」と。ヘル先生のレッスンというのは、全くそれまでとは正反対。曲や詩の内容から、これはこうあるべきだ、だからこう弾かなきゃいけない。最初にテクニクありきではなくて、内容を表現するためにこういう弾き方になると。レッスンに行くとき必ず、弾き終わった後、この詩はどういう詩だということ、ドイツ語で説明させられるので大変でした。その後、講習会等にも参加し、先生からは、「学生になってもう一回やるか」とおっしゃっていただいたのですが、三十近くで、齢も齢だったので帰国しました。

自筆譜ファクシミリを見てほしい。

―ソロの時どうプログラムにしようかという構想は？

梅本 そうですね、やはりドイツ

で勉強したからドイツ物ということもあるんですが……。―ドビュッシーというのは？

梅本 フランス音楽は元々掛け値なしに好きです。

―ドビュッシーは、美しい楽譜を書いているし、見るだけでハッピーになりますよね。

梅本 本当に楽譜が精密できれいですね。学生には自筆譜ファクシミリを絶対見てほしい。ドビュッシーは楽譜ひとつ取っても、美的センスに優れていた人だと思います。

『大地の歌』

―長島先生とお二人で『世紀末から二十世紀へ』というテーマで演奏を続けられていますか。

梅本 はい。ちょうど二十一世紀になった二〇〇一年からのシリーズを始めました。あの時代、色々な分野に様々な魅力的な人物が輩出して、調べれば調べるほど必ず何かつながつていくんです。そういえばマーラーの『大地の歌』の作曲小屋へ行ったことがあって……

―あ、『大地の歌』ピアノ稿をサヴァリッシュさんが本学講堂で初演しています。先生方の演奏も本当に素晴らしかったですか？

梅本 いやいや。オーケストラの音に慣れている方からはピアノでは物足りないと言われることが多かったです。それで何とかオーケストラの響きに近づこうと、スコアを見ながら何度も何度もCDを

聴きました。DVDでバーンスタインの振り真似までして。「ここでこういうふう振って、こう出るんだな」とか、それをピアノに取り入れてみようとか。逆にピアノではもっと細かいニュアンスを作ったりすることができるので、そういうところは最大限、ピアノの良さを出して、少しでもマラーが考えていた音の世界に近づこうと努力しました。実際やってみて、ピアノ版はピアノ版なりの価値があるということも分かりました。

—現地を訪ねたり、資料をたくさん見たからと言って、それだけで、ピアノがうまくなるのでしょうか？

梅本 ということはないでしょうが、それをきつかけに、「もつとこういうことが知りたい」という欲求が出てきて調べ、本を読んだり、…現地に行くと、もつとこれも知りたい、あれはどうなっているのだろうということが出てきて、それが次のきつかけになりますね。

歌手とピアニスト

—歌とピアノで意見が違ったことはないですか？

梅本 長く一緒にやっていても、初めての曲の場合、意見は違うことが多いです。最初はそれぞれ自分の思ったようにやりますから、

それで険悪な雰囲気になってしまふと、次の時まで何ともしなければならぬ…まあピアノのほうに合わせて多いでしょう。歌い手には、やはり気持ち良く歌ってもらわなければならぬから(大笑)：実は、ピアノに原因がある場合もあります。とても歌い切れないような遅いテンポを取っていたり、器楽的に弾いていて息の流れが悪く歌いにくいか、或は詩の解釈に開きがあるとか。だから、次の練習までには、少し…それでうまくいかない時、たまにやるのは「ちよつと歌ってみて、私が弾くから」と歌手が弾いて私が歌うのですが、「こういうふうにあなたは弾いているけど、それでこういうふうに歌える？」って言われて、「うーん」と分かることもあります。そういうのを繰り返して、だんだん本番近くなると、否が応でも形になるものにならなげやいけなないので…。

対象に対する愛と仲間達

—学生に熱きメッセージを。

梅本 ここで学んで、音楽家になる人もいるし、そうじゃない道へ進む方もたくさんいると思うのですが、「若い頃熱中したものがある人は、逆境に立たされた時に強

い！人間の本当の価値は逆境に立たされた時に初めて分かる」と聞いたことがあって、若い頃勉強やスポーツ、音楽に熱中したとか、何か真剣に愛情を傾けられる対象を持ったことがある人は逆境を乗り越えていく力があるのだと、実感しています。

—挫折への対処法とかがあるようでしたら？

梅本 ぼくの場合何とかここまでまがりなりにやってこれたのは、音楽があつたから。自分の心の支えになり、愛情を注げる「何か」が見つかったことは本当に良かったと思つています。あとは仲間ノ励ましてくれる仲間が学校に行けば必ずいますからね。大学で勉強するということは、同じ目的を持つた仲間と一緒に切磋琢磨しながら

ら、悩み、愚痴を聞いて、励まし合いながらやっていけるといふことだと思ふんです。あと、先生方がいて励ましてくれたり、怠けている時は叱つてくれたり、それが大学の良さですね。その点にたちの雰囲気は素晴らしいです。勤めているから言うわけじゃないですけど、(大笑)学生時代に戻れたら、く・に・た・ち・で勉強したかったなと、本気で思っています。ここで本当の音楽に出会い、たつぷり愛情を感じて外に出て行つてほしいです。—演奏会のご予定とか、伺いたいのですが？

梅本 毎年秋季にやっている演奏会が十月三十一日(金)に津田ホールであります。

—貴重なお時間本当にありがとうございます。

梅本先生おすすめの資料

図書・楽譜

- ◆『Arnold Schönberg 1874 ~ 1951』Ritter Klagenfurt 1992 請求記号●J77-996
大分前に大変な思いをして日本に持ち帰ったこの重たい本が図書館にあるのを知り感激。シェーンバルクの生涯が豊富な写真資料と共に一覽でき、彼が生きた時代の空気を良く感じ取れる。
- ◆『Die Prinzessin』Carl Hanser Verlag 2006 請求記号●J112-211
シェーンバルクは作曲以外にも数々の創作をする人であった。これは彼が自分の家庭で子供たちに語った童話が絵本になっている。ちなみに彼の肉声によるこの本の朗読はシェーンバルク・センターのHPで聴くことができる。
- ◆『L'Isle joyeuse / Claude Debussy』Henle 2011 請求記号●G33-403
ドビュッシーの『喜びの島』の自筆譜ファクシミリ。彼の自筆譜は非常に美しく、美術品を鑑賞しているようである。見ているだけで彼の音楽が流れてくるような感じを受け、演奏する人たちは必見である。
- ◆『Klaviersonate in C-Dur op.53 / Ludwig van Beethoven』Beethoven Haus 1984 請求記号●C51-079
ベートーヴェンの『ワルトシュタイン・ソナタ』の自筆譜ファクシミリ。彼の自筆譜はドビュッシーと比べるといささか乱暴な筆跡で書き直しも多いが、彼の音楽のダイナミズムが良く伝わってくる。

CD

- ◆『Lieder / Richard Strauss』Capriccio 1997 COC080685 請求記号●XD 38895
演奏者である白井光子(メゾ・ソプラノ)、ハルトムート・ヘル(ピアノ)の両先生からは大きな影響を受けた。先生方の録音は多数あるが、これは今年生誕150年を迎えたりハルト・シュトラウスの歌曲集。今月白井先生が来校されるのも楽しみ。